

清少納言と藤原実方との贈答歌について

—歌語「かはらや」を糸口に—

徳 原 茂 実

清少納言と藤原実方との間に親密な関係があったらしいことは、

『枕草子』の解説文などにもしばしば言及されており、周知のこと
がらと言つてもいいだろう。ところが、藤原実方は『枕草子』の二
つの段に登場するが、いずれにおいても清少納言と実方との個人的
な交友関係は物語られてはいない。「小白川といふ所は」の段(旧
大系三五段、新潮集成三二段、新編全集三三三三)では、法華八講の
場において清少納言は実方の動靜に注目してはいるが、二人の間には
何らの交渉も生じない。「宮の五節いださせたまふに」の段(旧
大系九〇段、新潮集成八五段、新編全集八六六)においては、実方
の歌に対して清少納言が、中宮定子に仕える女房を代表して返歌を
詠まざるをえない状況に追い込まれるが、取次ぎの女房の不手際の
ためにうまく伝わらなかつたという、ぱつとしない顚末が語られ、
ここでも二人の個人的な交流は成り立つてはいないのである。^(注)

このように、『枕草子』に限れば清少納言と実方との親密な関係
は知りえないのであるが、ではなぜその交流が取り沙汰されるかとい
うと、二人が交わした恋愛贈答歌が一組今に伝わり、その詞書と
歌から、二人が昵懇の間であつたらしいことが知られるからであ
る。^(念) 本稿では、この贈答歌についての従来の解釈について改めて

検討を加え、新たな解釈を提示してみたい。

一

まずは『後拾遺集』恋二から、実方の歌(七〇七番歌)を引こう。
引用は岩波新大系『後拾遺和歌集』により、一部表記を改めた。

清少納言、人には知らせで絶えぬなかにて侍りけるに、久
しうおとづれ侍らざりければ、よそよそにて物など言ひ侍
りけり、女さしよりて、忘れにけりなと言ひ侍りければよ
める
(藤原実方朝臣)

忘れずよまた忘れずよ瓦屋のしたたくけぶり下むせびつつ

詞書には、およそ次のようないきさつが語られているのだろう。実
方は清少納言と、人知れず交際していたが、しばらく音信が絶えて
いたので、久しぶりに訪れた実方が、他人行儀なやりとりを交して
いた。すると、急に彼女が近づいて、「忘れにけりな」(お忘れになつ
たのね)と言つたので、実方は歌を詠んだというのである。なお、

「忘れにけりなど」と判読すると、「忘れにけり」が清少納言の言葉ということになり、彼女が実方を忘れてしまったの意となつて、不自然であろう。「忘れにけりな」を清少納言の言葉と解釈した。

さて、『後拾遺集』にはこの通り、実方の歌しか採られていないのであるが、『実方集』と『清少納言集』には、清少納言の返歌も併せて収められている。まず『実方集』を引こう。引用は岩波新大系の『平安私家集』所収『実方集』^(金)により、一部表記を改めた(一八一、一八二番歌)。

元輔がむすめの、中宮にさぶらふを、おほかたにて、いとなつかしうかたらひて、人には知らせず、絶えぬ仲にてあるを、いかなるにか、久しうおとづれぬを、おほぞうにてものなど言ふに、女さしよりて、「忘れ給にけるよ」といふ、いらへはせて、立ちにけり、すなはち

忘れずよまた忘れずよかはらやの下たくけぶりしたむせびつ、
返し、清少納言

葦の屋の下たくけぶりつれなくて絶えざりけるも何によりてぞ
詞書に「おほかたにて、いとなつかしうかたらひて」とあるのは、男女の深い関係をぬきにした良好な仲であつたという断り書きであるようだが、一時期深い関係を結んだ可能性を否定するものではなく、『後拾遺集』詞書で親密な関係が語られているのと矛盾するわけではない。『後拾遺集』と異なるのは、詞書の末尾に、その場では即答せず、一旦立ち去つたあと、すぐに歌を届けさせたという、具体的ないきさつが説明されていることである。これはおそらく、

即座に歌を詠めなかつたのではなく、周囲の目をはばかつた行動であろう。「人には知らせず、絶えぬ仲」という二人の関係を維持するために、まことに適切なふるまいであつたといえよう。

『清少納言集』の伝本は、流布本系と異本系との二系統に分類されているが、流布本系にのみこの贈答歌は見出される。『私家集大成』から書陵部蔵(五〇一・二八五)本を引く。適宜濁点を付し、仮名表記の一部を漢字表記に改めた(一〇、一一番歌)。

宮のあまた殿におはします比、実方の中將まいり給て、おほかたに物などのたまふに、さしよりて、忘れたまひにけりなど言へど、いらへもせで立ちにける、すなはち言ひをくりたまへる

わすれずやまたわすれずよかはらやの下たく煙下むせびつ
返し

しづのをは下たく煙つれなくてたえざりけるもなによりそもしづのをは下たく煙つれなくてたえざりけるもなによりそも
「宮」は当然ながら中宮定子であろうが、「あまた殿」がわからない。萩谷朴氏は「あはた殿」と校訂しておられるのであるが、氏も指摘しておられるように、「粟田殿」と汎称される邸宅に定子が滞在したとは考えられず、何らかの誤謬が介在するものと思われる。なお、この問題については本稿の最後に言及したい。

ともあれ、中宮が滞在している邸に実方が参上し、女房たちと社交的な会話を交しているところに清少納言が近づいて「忘れたまひにけりな」とプライベートな言葉をささやいたというのである。『後拾遺集』や『実方集』とくらべて、詠作事情は異ならない。二人の

関係についての詳細な説明がない点ではこれら二集と異なるが、言葉をかけられたあとの実方のふるまいについての記述は『実方集』と似通っている。

このように、実方と清少納言の間で交わされて今に伝わるただ一組の恋愛贈答歌は、一条朝宮廷におけるスター級の男女の親密な関係が明かされるといって、きわめて興味深い内容であるが、肝心の和歌についての従来の解釈は、正しいとは言い難いように思うのである。それはひとえに、歌語「かはらや」の解釈にかかわる。

二

実方の歌についての従来の解釈を、ひととおり見ておきたい。岩波新大系の『後拾遺和歌集』脚注には、次のように説かれている。

あなたのことは忘れない上にも忘れないよ、そして心は変わらないよ。瓦を焼く小屋の下で焚く煙にむせるように、心の中でむせびながら。実方朝臣集、二句「またかはらずよ」。(中略)
○また忘れずよ 家集の「またかはらずよ」の方が下への続きはよい。○瓦屋「変らず」という語を響かせる。(後略)

「かはらや」を「瓦を焼く小屋」と解しているのに注意しておきたい。なお、「わすれずよまたかはらずよ」という本文は群書類従本『実方朝臣集』等に見られるのであるが、確かにそれだと第三句「かはらやの」への続きがよく、本来はこの本文であったかとも想像される。しかし本稿では『後拾遺集』『実方集』『清少納言集』の大方の

伝本に第二句「またわすれずよ」とあるのに、ひとまず従っておきたい。

次に岩波新大系の『平安私家集』所収『実方集』の脚注を引こう。

(詞書についての注記7件略) 忘れません、ええ忘れせんとも。瓦屋の火が下でくすぶるように、表に現れないだけなのです、私の気持は。○かはらや 瓦を焼く窯。「わが心変はらんものか瓦やの下たく煙わかへりつつ」(長能集)。同音で「変はら(ず)」を導く。(以下略)

ここでは「かはらや」は「瓦を焼く窯」と注されているが、新大系『後拾遺集』脚注にいう「瓦を焼く小屋」と大きな違いがあるわけではない。瓦を焼く窯(かま)を覆う小屋をイメージするかどうかの違いであって、いずれも「かはらや」を瓦製造のための施設と解していることに変わりはないのである。なお、これら岩波新大系の二書に先立つ萩谷朴氏の著書や木船重昭氏の著書においても、「かはらや」は「瓦焼き小屋」(萩谷氏)、「瓦を焼くかまど」(木船氏)と、同様の解釈がなされているのである。

確かに「かはらや」が瓦を焼く施設を意味することはあったように、たとえば『角川古語大辞典』が指摘するように、『和名抄』に「窯賀波良夜 瓦を焼く竈也」(原漢文)とあるのはその一例である。

しかし、「かはらや」には瓦葺の建物の意もあることを見逃してはならない。『岩波古語辞典』は『日本書紀』舒明即位前紀の「尼寺の瓦舎(かはらや)に逃げ匿る」(原漢文)という用例を、「瓦葺の家屋」の用例として掲げている。平安期の和歌の用例としては、『金

葉集」(再奏本) 雜部下(六五四)に、次のような短連歌があるのを挙げることができよう。引用は『新編国歌大観』により、適宜表記を改めた。

かはらやを見て

よみ人しらず

かはらやの板ぶきにも見ゆるかな

助成

つちくれしてやつくりそめけん

前句では瓦葺の建物が板葺のように見えると疑問を呈し、付句ではその理由を、その瓦は土塊(つちくれ)という樽(くれ。材木の意)で作り始めたからだろうと洒落たのである。前句の「かはらや」が瓦を焼く窯(小屋)である理由はなく、『角川古語大辞典』がこれを「瓦葺きの建物」の用例として掲げているのは適切な判断といえよう。

では、実方の歌「忘れずよまた忘れずよかはらやの下たく煙下むせびつつ」の「かはらや」は、瓦を焼く窯か、瓦葺の建物か、いずれであろうか。「下たく煙」は当然「瓦を焼く窯」で焚く火の煙のこと、というのが諸注のお考えであろうが、瓦葺の建物の中でも、暖房、照明、薰香、炊事、蚊遣りなどのために火を焚く必要は少なからずあるはずだ。瓦葺の屋根は通気が悪く、煙が上部へ抜けないから、部屋の中に立ちこめた煙にむせぶこともありえよう。そもそも、塩焼く煙や炭窯の煙が風景美の点景として和歌や絵画に取り上げられ、人々の関心を引くことはあっても、瓦を焼く窯というきわめて散文的な存在が人の注意をひきつけ、和歌にまで詠まれるかど

うか、大いに疑問と言わざるをえない。

実は、清少納言の返歌と併せ考えるならば、実方の歌の「かはらや」は、瓦葺の建物と解さざるをえないように思うのである。次節で検討を加えてみたい。

三

清少納言の返歌を、建治元年奥書本を底本とする岩波新大系『平安私家集』所収『実方集』から、再度引用しよう。

葦の屋の下たくけぶりつれなくて絶えざりけるも何によりてぞ

同書脚注には、「下で燃えている煙が、表面には(燃えているとも)見えなくて、消えてしまわないというのも(いったい)何がそうさせるのでしょうか」という解釈文が掲げられ、さらに「葦の屋」について「葦で葺いた粗末な小屋」と注されている。

ところで、清少納言がここで「葦の屋」なる言葉を選択したのは、実方の歌の「かはらや」に対応させたからとしか考えられない。すると、「葦の屋」が葦で屋根を葺いた粗末な建物であることに間違いはないから、それに対応する実方の歌の「かはらや」は、瓦で葺いた建物の謂いでなければならない。実方は瓦を焼く窯の意で「かはらや」と詠んだにもかかわらず、清少納言はそれを瓦葺の建物の意と誤解または曲解し「葦の屋」で応じた、といった推測はナンセンスであろう。実方が持ち出した「かはらや」(瓦葺の建物)の重厚さに対して、清少納言は粗末な「葦の屋」で応じて卑下してみせ

たというのが、この両語についての自然な理解ではなからうか。

さて、実方の歌の「かはらや」を瓦葺の建物の意と確定するならば、「かはらやの下たくけぶり」の歌句は、瓦葺の建物の部屋にたちこめる煙を意味することになり、そこから連想されるのがどのような種類の煙であるとも、瓦を焼く猛烈な炎と煙のイメージよりも、はるかに優雅な情景ということができよう。実際、先にも述べたように、瓦葺の屋根は通気が悪く、煙が屋根から抜けないから、瓦葺の官公庁や寺院に出入りする人々には、屋内に煙が立ちこめる情景は、珍しからぬものであったにちがいない。

一方、葦葺の小屋の中で火を焚いても、立ち昇る煙は通気の良い屋根から外へ排出されるから、よほどのことがない限り、部屋の中には充滿しないのであろう。したがって、清少納言の歌の上句「葦の屋の下たくけぶりつれなくて」とは、葦葺の小屋で焚く火の煙がほどよく外へ排気され、煙に咽ぶといった不都合がなく、平気でいられることを意味している。そして第三句「つれなくて」から下句にかけて、「私が何気ないふりを装いながらあなたへの思いを絶やさなかったのは何のためだったのでしょうか（何の甲斐もなかったことです）」といった歌意が導かれる。長らく絶えることのない我が恋心を、静かに燃え続ける葦葺小屋の囲炉裏火に喻えたのである。

このように、実方は瓦葺の建物の中に立ちこめる煙にたとえて、自らの思いをいささか大げさに「下むせびつつ」と表現し、清少納言は葦葺の小屋でこともなく立ち続ける煙にたとえて、自らの長らく秘めた思いを表出したのであった。実方の歌の「かはらや」と清少納言の歌の「あしのや」とは、両者の親密な関係物を語るこの重要な贈答歌を正しく解釈するための、まさにキーワードであったと

いえよう。^(注9)

なお、清少納言の歌の初句を「しづのやの」とする伝本があるが、「しづのや」と「かはらや」との対照性は明らかであり、この本文に従ったとしても、本稿で提示した解釈に不都合は生じないであろう。一方、先に引用した書陵部蔵「清少納言集」では、清少納言の歌の初句が「しづのをは」とされているが、これだと実方の歌の「かはらや」に対応する歌語が存在せず、贈答歌としては不適切な表現と言わざるをえないのではなからうか。^(注10)

四

本稿では、実方の歌の「かはらや」を瓦葺の建物と解し、清少納言の返歌の「あしのや」（あるいは「しづのや」）を、それに対応する歌語と認定することによって、この贈答歌を解釈しなおしてみた。その結果、清少納言の返歌が、男女間の贈答歌によくある当意即妙の知的遊戯にとどまらず、実方への思いを率直に表現した一首であったことが明らかになったと思うのである。

ところで、「かはらや」とは珍しい歌語であって、実方と同時代人の藤原長能の家集に「わが心かはらんものかかはらやの下たくけぶりわかへりつつ」とあり、それへの女の返歌に「しのお思ひひとしくなればかはらやのけぶりはやくたえにしものを」とある^(注11)が、実方・長能以前の用例は見出せない。実方の歌と長能の歌との先後関係は明らかでないが、新たな素材を取り上げてそれを先例としてしまうという当意即妙のセンスは、長能よりはるかに実方にふさわしいと言えよう。^(注12)

では、実方は清少納言に歌を贈るにあたつて、どうして瓦葺の建物の意味する「かはらや」なる言葉^{言葉}を着想したのであるうか。そこで想起されるのは村井順氏の論考である。氏は群書類従本『清少納言集』における当該贈答歌の詞書に「宮の、あはた殿におはしますころ、さねかたの中將まあり給ひて」云々とあるのに注目して、次のように論じておられるのである。

定子中宮が粟田殿においてであつた記録は見当らない。あるいはこは、「あいたどころ（朝所）」の誤りではないかと思う。それは、実方の歌に、「かはらや」という、歌にはあまり見ないことばが使われているが、実方ほどの歌人が、こんなことばを不用意に使うはずがない。これは必ず身近な所にあるものを詠みこんだのでなくてはならぬ。ところが、「枕草子」の「故殿の御服のころ」の朝所の様子を讀むと、「つとめて、見れば、屋のさまいとひらにみじかく、瓦ぶきにて、唐めき、さまことなり」とあつて、この朝所は瓦ぶきである。だからこそ実方は、「かはらや」のことばを用いたのである。

村井氏はこのように述べておられる。半世紀近くも前に、すでに実方の歌の「かはらや」を瓦葺の建物と解する説が存在したのである。ただし清少納言の返歌については、「しづのをは」の本文に従つて、「身分のいやしい男は、表面は平氣な顔をしていて、心の中では、燃えないで下でいぶる煙が絶えないように、絶えず思つていたとおっしゃるのも、何によつてでしょうか」云々と解釈されたために、通説と同様、二首をつなぐ言葉の関連性が見えにくくなつてしまつ

た。

『枕草子』の「故殿の御服のころ」の段（旧大系一六一段、新潮集成一五四段、新編全集一五五段）は、長徳元年（九九五）六月二十八日夜から七月八日まで、中宮定子が太政官朝所に滞在していた折の出来事から話は始まる。引用は新潮日本古典集成により、適宜表記を改めた。

故殿の御服のころ、六月のつごもりの日、大はらへといふ事にて、宮の出でさせたまふべきを、職の御曹司を「方あし」とて、官のつかさの朝所に渡らせたまへり。その夜さり、暑く、わりなき闇にて、何ともおほえすぜばく、おほつかなくて明かしつ。つとめて見れば、屋のさま、いとひらに短く、瓦葺きにて、唐めき、さま異なり。例のやうに格子などもなく、めぐりて御簾ばかりをぞ懸けたる。なかなかめづらしくてをかしければ、女房、庭に下りなどして遊ぶ。

ここに記されているように、中宮と女房たちが滞在した太政官朝所は、瓦葺の建物であつた。当時瓦葺は役所や寺院に多く見られたやうで、官庁街の一角にある朝所も瓦葺であつたのだ。このあと、女房達が陰陽寮の楼に登つたり、侍従所の椅子を倒したり的一幕が描かれたあと、次のような記述が続く。

屋のいと古くて、瓦葺きなればにやあらむ、暑さの世に知らねば、御簾の外に、夜も出で来、臥したる。古きところなれば、むかでといふもの、日一日落ちかかり、蜂の巢の大きにて、つ

き集まりたるなどぞ、いと恐ろしき。殿上人、日ごとまゐり、夜も明かして、ものいふをききて、「あにはかりきや、太政官の地の、いま夜行の庭とならむことを」と、誦し出でたりしこそ、をかしかりしか。

耐え難い暑さは、建物が瓦葺のせいであろうかというのが清少納言(たち)の推測で、確かにそれも一因ではあろう。この朝所に日夜、殿上人たちが訪問して女房たちと歓談するのであるが、その顔ぶれはいえ、このあとの七月七日のエピソードの冒頭に「宰相中将齊信、宣方の中将、道方の少納言など、まゐりたまへるに、人々出でて、ものなどいふに」とあることから、この三人の名が知られる。しかし連日の訪問者が彼ら三人に限られるはずもなく、七月七日のエピソードにはかわりがないのでこの段には名前があげられていないが、朝所を訪れた多くの殿上人の中に藤原実方が含まれていたとしても、何の不思議もなかうと思う。本稿で取り上げた贈答歌は、村井順氏の推測の通り、その折に交されたものであろう。

太政官朝所に滞在中の定子中宮を表敬訪問した藤原実方が、女房たちと世間話を交している、彼女たちからは、瓦葺の建物ゆえに猛暑が耐え難いとの話題が持ち出されたに違いない。その折そつと近づいて「忘れ給ひにけりな」とささやいた清少納言に、話題の「かはらや」(瓦葺の建物)を早速に詠み込んだ歌を贈ったのは、いかにも実方らしい当意即妙のふるまいと評することができよう。

一方、それに対する清少納言の返歌が、心の中で長らく燃やし続けてきた実方への思いを率直に告白するかのような内容であるのは、男の言い分に異を唱えるのが女歌の常套であることから考え

て、大いに気になるところである。先に記したように、中宮定子の朝所滞在は長徳元年(九九五)六月二十八日から七月八日までである。実方はこの年の九月二十七日に参内し、陸奥国赴任の由を一条帝に奏上しており、それからほどなく下向したものと推測される。想像するに、実方が朝所を訪れたころ、すでに実方の陸奥下向のことが世間にとりざたされており、清少納言は今後何年か会えなくなるに違いない実方に、思いのたけを率直に訴えようとしたのではないだろうか。三年後、実方が任地で他界したことを知った彼女の悲しみが思いやられる。

注

1 『枕草子』「なほめでたきこと」の段(旧大系一四二段、新潮集成一三五段、新編全集一三六段)に見える「頭中将」(三巻本)は実方ではありえない。実方に蔵人頭の経歴がないからである。これを「藤中将」と校訂し、実方をさすとする説(萩谷朴氏)があるが、『枕草子』において実方は「実方の兵衛佐」「実方の中将」と実名をもつて呼ばれており、実方に対して「藤中将」といひける人」という呼称は疑問。なおこの部分、能因本では「良少将」、前田家本では「在五中将」とある。

2 『拾遺集』悉四に詞書「元輔が婿になりてあしたに」、作者表記「藤原実方朝臣」とする一首(八五〇)が収められているが、異本系統の『拾遺集』によれば、詞書には「中将元輔が婿」云々とあって、これならば清原ならぬ藤原元輔の婿になったということになり、作者表記も「藤原信賢」とあって、流布本とは異

なっている。この異本の方が事実を伝えているであろうことは、早く岸上慎二氏の『清少納言伝記考』（昭和三十三年再刊 新生社）において説かれている通りで、従うべき見解といえよう。なお、異本『清少納言集』には清少納言から実方へ贈られたとされる歌が二首見えるが、それらは『為頼集』『小大君集』にも見え、清少納言の作かどうか疑わしい。

3 底本は書院部蔵建治元年奥書本（一五〇・五六〇）。この本の親本は冷泉家時雨亭文庫蔵・素寂本『実方中将集』である。

4 萩谷朴『清少納言全歌集 解釈と評論』（昭和六一年五月、笠間書院）二九ページ以下。本稿を草するにあたって、この書から大きな学恩をこうむった。

5 萩谷氏が注（4）書において、『清少納言集』のこの二首を『実方集』からの「輸入」（原文のまま）と想定しておられるのは、妥当な見解であろう。

6 木船重昭『実方中将集 子馬命婦集』（平成五年五月 大学堂書店）

7 岩波新大系『金葉和歌集』は、この連歌の「瓦屋」を「瓦を焼いて作る小屋」と注し、「瓦屋の板葺を、土くれの掛詞で説明したのが趣向」と説いているが、疑問。板葺の屋根をさして「板葺にても見ゆる」（板葺であるように見える）とは表現しないのではないだろうか。

8 保立道久「領主本宅と煙出・釜殿」（同氏著『物語の中世』（平成十年、東京大学出版会）所収）などに指摘されているように、炊事を行う釜屋の屋根には、排煙の設備（煙出）が設けられていた。しかし、建物の大部分を占める儀式空間や居住空間にお

いては、そのような設備はなされていないようである。

9 実方歌の「かはらや」を瓦を焼く窯（小屋）と解することは、清少納言の返歌の「葦の屋」の解釈を困難ならしめる。萩谷朴氏は前掲書において、「葦の屋」を「芦葺きの（瓦焼きの）小屋」と解し、木船重昭氏は前掲書において、それを「瓦作りの職人の家」と解し、竹鼻績氏は『実方集注釈』（平成五年 貴重本刊行会）において「葦で葺いた瓦屋の窯」と解しておられるが、いずれも「かはらや」についての通説にもとづく誤解であろう。

10 資経本『実方朝臣集』、群書類従本『実方朝臣集』、あるいは建治本『実方朝臣集』異本注記など。

11 萩谷氏は前掲書において「しづのをは」の本文をよしとしているが、それは「かはらや」を瓦焼きの窯と解釈した上での御見解で、本稿の論旨とは相容れない。なお、氏の御説によれば、「実方の平然たる態度を、瓦焼き職人に喩えて鋭く追及したことになる」とのことであるが、実方を「しづのを」（瓦焼き職人）にたとえたという解釈には、二人の身分的、心理的關係からして違和感をおぼえる。おそらくこの種の違和感が、この清少納言歌に対する従来の低い評価につながったのであろう。

12 神宮文庫蔵本を底本とする『新編国歌大観』第三卷所収「長能集」による。なお、この長能歌は『後拾遺集』恋四（八一八）所収。

13 臨時の祭の試楽に遅参した実方が、挿頭の花の代りに呉竹の枝を折って挿したところ満座感嘆し、これが先例になったという話（『古事談』など）は、和歌にまつわる話ではなく、事実かどうか不明だが、実方の当意即妙のふるまいに対する後世

の高い評価を物語っている。

- 14 村井順『清少納言集』について」(『淑徳国文』第五号 昭和四二年九月)。なお、同氏著『清少納言をめぐる人々』(昭和五一年 笠間書院)にも同様の記述がある。

- 15 『日本紀略』 同日条。『権記』 同日条。

(とくはら・しげみ 本学教授)